

『古代アメリカ』 7, 2004, pp.59-63

<特集：調査速報 —2003年のフィールドから—>

ペルー共和国、アヤクーチョ県、トリゴパンパ村、 クルス・パタ遺跡の発掘調査

土井正樹
(総合研究大学院大学)

1. 調査目的

アンデス文明史上、紀元後 550 年～1,000 年頃に相当する中期ホライズンと呼ばれる時期は、ワリ社会が存在した時期として知られる。このワリ社会は、ペルー共和国、アヤクーチョ県、アヤクーチョ市の北方に位置するワリ遺跡を中心として栄えたと考えられている。ワリ遺跡の土器や建築などに認められる特徴を有する遺物、遺構は、ペルーを中心とする中央アンデス地域の広い範囲に渡って分布している。

ワリ社会に関する調査は、ワリ遺跡、ペルー北部のピラコチャパンパ遺跡、ペルー南部のピキリヤクタ遺跡に代表される、計画的に建設された大規模建造物が存在する「センター」の調査に集中してきた。その一方で、「センター」周辺の同時代の小遺跡にはほとんど関心が払われてこなかった。

この発掘調査の目的は、ワリ社会の「センター」周辺における小遺跡での活動内容に関する資料を入手することであった。

2. 調査遺跡

今回発掘調査を行ったのは、クルス・パタ遺跡である。クルス・パタ遺跡はペルー共和国、アヤクーチョ県、ワマンガ郡、ティクリヤス地区のトリゴパンパ村のはずれにある同名の丘に位置している(図1)。トリゴパンパ村にはこのクルス・パタ遺跡のほか、タンタ・オルホ遺跡、ワンカ・ハサ遺跡の計3つの遺跡が存在している。遺跡の周囲には扇状地平野が広がり、付近にはわき水も存在する。そのため、農業には適した土地であり、現在でもそこではジャガイモ、ニンジン、トウモロコシ、タマネギ、ニンニクなどが栽培されている。また、ワリ遺跡から見て、この遺跡は、西南西の方向に直線距離で10kmほどの地点にある。

3. 発掘調査

1) 2002 年の調査

2002 年の 8 月から 10 月中旬にかけて、トリゴパンパ村に存在する 3 遺跡を対象とし、第 1 次発掘調査を行った。発掘調査に先立ち実施した一般調査によって、地表の遺構や遺物の状況から、これら 3 遺跡の調査により、中期ホライズンの前後の時期を含む、この地の長期的な利用法を解明できる可能性が判明した。また、遺物、遺構の考古学的状況に加え、耕作地との隣接性も併せ、「センター」としてではなく、これら 3 つの遺跡は日常的な活動の場として機能していたと想定することができた。このような理由により、トリゴパンパ村での発掘調査を実施した。

この第 1 次発掘調査では、タンタ・オルホ遺跡、ワンカ・ハサ遺跡の発掘に多くの時間を割き、クルス・パタ遺跡では、3 地点の試掘を行ったに留まった。その結果、タンタ・オルホ遺跡の利用時期が中期ホライズンの前後の時期に相当する前期中間期（紀元後約 300～550）と後期中間期（紀元後約 1000～）であること、ワンカ・ハサ遺跡の利用時期が前期中間期後期であることが確認でき、また、それらの遺跡の利用状況を示す複数の部屋の状況も明らかとなった。しかしながら、クルス・パタ遺跡に関しては、建築遺構の存在と、その利用時期が中期ホライズンである可能性が高いということが確認できたにすぎなかった。中期ホライズンの非「センター」での活動内容を明らかにし、さらにそのような活動を前期中間期から後期中間期に渡る長期的な脈絡に位置づけるために、クルス・パタ遺跡での発掘調査を継続することが今後の課題として残った。

2) 2003 年クルス・パタ遺跡発掘調査

2003 年 10 月、クルス・パタ遺跡において第 2 次発掘調査を行った。

第 1 発掘区 (図 2)

最初に発掘地点として選んだ第 1 発掘区は、2002 年の試掘で副葬品を伴う墓が確認できた場所である。そこでは墓だけでなく、住居の存在を示唆する壁の一部も確認できていたため、この場所での発掘は、ワリ期に行われた活動に関する資料を収集するのに適していると考えた。

この発掘区は、丘の頂上部から西に走る尾根沿いに少し下った地点にあり、尾根から南に下る斜面上に設定された、広さ 5×10m、北東-南西方向の長軸をもつ長方形の区画である。しかし、予想に反して遺跡の保存状態は極めて悪く、尾根に近い地点の堆積は、主に表層(S 層)とその下の A 層の 2 層だけであり、A 層は 10cm ほどの堆積しかなかった。またここでは、かつて部屋もしくは通路を構成していたと考えられる石積みの壁が断片的に確認できた。それらは地山の上に石を積んだだけであり、地山を掘り下げる基礎工事は行われていない。また、地山をならしただけの床面も見つかった。

この発掘区の南西端(斜面下方)では東西の方向に走る石積み壁が見つかった。この壁は両面壁であり、地山を 30cm ほど掘り込んで建設されていた。この壁の北側では厚さ 30cm ほどの A 層の下に 20cm ほどの厚みをもつ灰層が存在した。A 層は倒壊した壁に由来すると思われる大石を多数含んでいた。その下の灰層は斜面の上方から下方に向かって厚みを増し、その下方の壁によってせき止められるような形で堆積していた。また、灰層の下は地山であり、そこには地面の焼けた跡が

見られないことから、この灰はその場での活動によって生じたものではなく、この場の放棄時あるいはその後間もない時期にそこに廃棄されたものであると考えられる。また、この灰がゴミとして廃棄されたことを裏付けるように、そこには大量の土器片が含まれていた。

この発掘区から出土した土器片に認められた时期的特徴は、中期ホライズンのものであった。

第2発掘区 (図3)

第1発掘区では目的とするデータが収集できなかったため、第2発掘区での発掘調査を行った。この発掘区は8m×8mの正方形をしており、第1発掘区から西へ約30m離れている。

ここでの調査にあたって、4方が壁で囲まれ閉じた空間を部屋とし、壁で囲まれてはいるが閉じてはいない空間を建築空間(EA=Espacio Arquitectónico)として区別した。第2発掘区は第1発掘区に比べ遺跡の保存状態が良く、この発掘では4つの部屋(R1～R4)と4つの建築空間(EA2, EA4, EA6)が見つかった。

建造物の壁は全て両面壁である。その壁石の多くは、その土地にふんだんにある自然石であり、壁の面をそろえるために打ち割などの単純な加工が見られるものもある。それらの石は横2列あるいは3列をなすように積み上げられ、石同士を固定するために泥が使用されていた。これらの壁の建設にあたっては、地山をならした上でその上に石を積んでおり、地山を掘り込んでそこに壁の基礎を築くことは行われていない。

建築フェイズとして2つのフェイズが認められた。第1フェイズで、この発掘区で見つかった建造物の大半が建設され、第2フェイズではその建築プランが僅かに修正されたことが明らかになった。このことを示すのが小部屋R1とR3である。この2つの部屋が存在する場所は元々1つの空間であったが、中央部の仕切壁とR1へのアクセスを制限する壁が設けられ、さらに床面が20cmほど嵩上げされ、これら2つの小部屋が建設された。

床面が焼けている場所が2カ所見つかった。EA4では、床面に相当する地山表面に焼けた跡が見つかった。この床面は厚さ40cmほどの灰層で覆われており、この灰層からは焼けた土器片や獣骨が見つかっており、この場で調理が行われていた可能性がある。

部屋R4では、もう1つの焼けた床面が現れた。ここでは床面だけでなくその傍らの石壁も焼けていた。床面が焼けていたのは部屋の北西角であったが、その隣には楕円形に石が並び、その内部がややくぼんだ構造物が存在する。その大きさは東西軸が90cm、南北軸が80cmほどであり、穀物などを粉にするための石台(batán)の土台であった可能性がある。ここもやはり調理場であった可能性がある。

他にもこの発掘区内でかつて行われていた活動を示す遺物が出土している。焼けた床面が見つかったEA4に隣接するEA3では、90×70cmの大きさの楕円形に近い形をした石台が見つかった。この石台の下からは、この石台を設置するための土台となる石を並べた基礎と、頭部にひも状のものを通すための穴の開いた2.5cmほどの大きさの小型石製人形が見つかった。また、石台の周辺からは石鍬が数個見つかると、長軸が15cmほどのものがその1例である。これはT字型あるいは足の形をした石器であるが、その機能に関しては、名称通り農具としての使用のほか、土器製作や粘土の採取に使用された可能性も指摘されている。石台は普通穀物を粉にするために使用されるが、土器製作のために乾燥した粘土を粉にする使用法も考えられる。EA4の灰層は、そこで豊富な燃料が燃

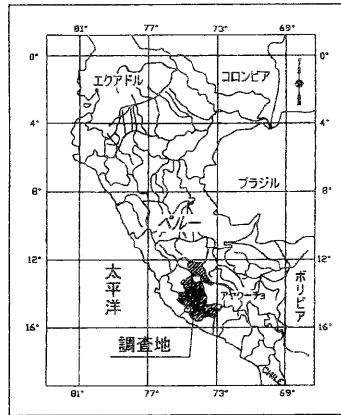


図1 調査地

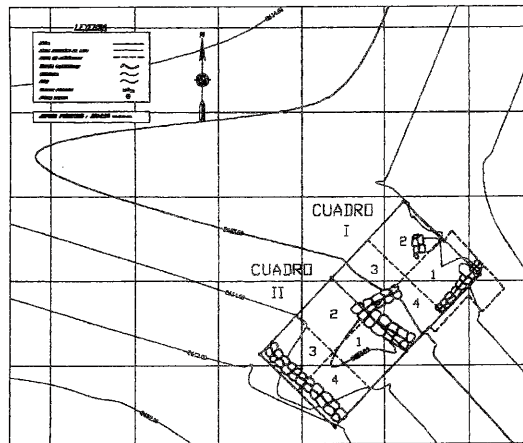


図2 クルス・パタ遺跡第1発掘区 (グリッド・サイズ4×4m)

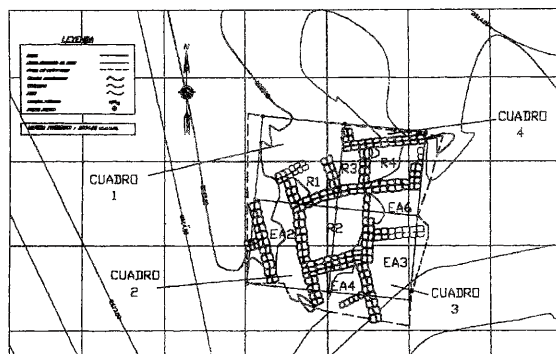


図3 クルス・パタ遺跡第2発掘区 (グリッド・サイズ4×4m)

やされたことを示しており、そこでは調理ではなく、土器焼成が行われていた可能性もある。

土器製作に関連した遺物は他にも見つっている。それは「パレット」と呼ばれる小型で薄い板状の土製品である。その形態、大きさには様々なものがあるが、一例として大きさ6cm×4.5cm、厚さ2mmほどの楕円形のものがある。その機能としては、土器の文様を描くための顔料の受け皿、すなわちパレットとしての使用、あるいは土器の器面を滑らかにしたり磨くものとしての利用が指摘されている。しかし、今回の発掘で出土した「パレット」には一見そのような使用の痕跡はなく、それが果たして土器製作に関係しているのかは、現時点では不明である。

また、スポンディルスや海に生息する貝の貝殻の加工品という、遠隔地に由来するものも見つっているが、それらの入手経路は不明である。

発掘調査時の観察では、この発掘区で出土した土器片は、中期ホライズンの特徴を示していた。

4. 今後の課題

ワリ社会の政治組織に関する研究は、すでに述べたように「センター」の調査中心で進められてきた。その結果、ワリ社会の政治構造の輪郭が明らかとなってきたが、「センター」の周りの小遺跡に注目した研究はほとんどない。まず、今回の発掘調査で出土した遺物の分析を行い、「センター」外の遺跡での活動に注目し、ワリ社会の政治構造を解明する作業に取りかかるつもりである。

この作業を行うためのキーワードとして現在考えているのが「饗宴」である。ワリ社会の「センター」においてどのような政治的活動が行われていたのかは、まだ十分に明らかになっていないが、食べ物や飲み物をふんだんに振る舞う「饗宴」を催すことが、「センター」での重要な政治的活動の1つであったという指摘がある。この考えは、インカ社会において、道路建設などの国家的事業や太陽神とインカ王の土地での耕作に必要な労働力確保のため、支配民に対して国家主催の「饗宴」が行われたことに基づいている。「饗宴」の開催は、国家の政治的結束を固めるのに役だったともいう。今後、ワリ社会の「センター」とその周りの遺跡との間にいかなる関係が存在したのかを知るために、両者における「饗宴」の痕跡を検討し、それが「センター」のみに認められるものであるのかを確認する必要がある。すでに、「センター」で「饗宴」が催されていたという報告はあるので、土器全体に占める給仕用の土器の割合や調理場の規模に基づき、クルス・パタ遺跡での「饗宴」活動の痕跡が見られるのか検討することによって、両者の政治的関係を明らかにすることができるであろう。

また、ワリ社会の政治構造を動的に理解するためには、ワリ社会の政治構造とその前後の時期の社会における政治構造とを比較することが有効である。したがって、クルス・パタ遺跡の資料と、別の時期に属するタンタ・オルホ遺跡とワンカ・ハサ遺跡の発掘資料とを、各時期のセトルメント・パターンを参照しながら比較することも必要である。

